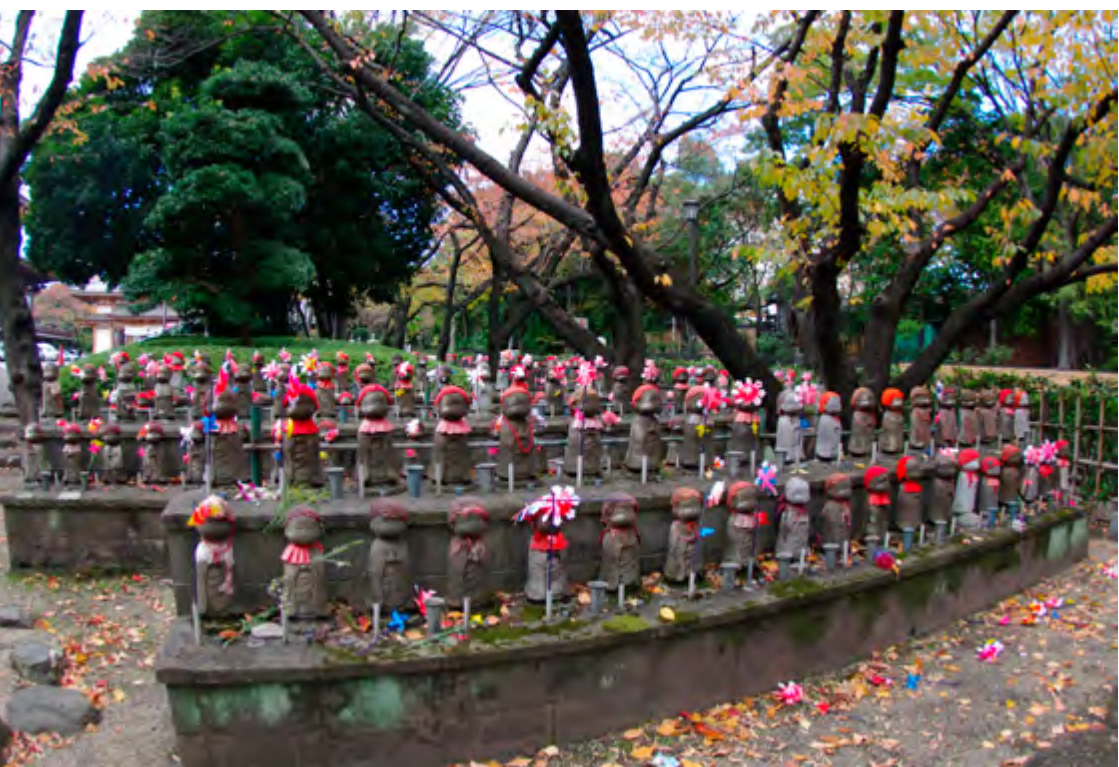


あを 11

2018



神世月

鯨もわが身の業も煮ゆるかな

万太郎



山形紬

あそ

十一月



東京

佐藤 喜孝

さそつたら

逃げ水や蹤いてきたのよさそつたら
あげは蝶顔にかむさり去りにけり
しなやかな指もて迫る藪からし
爪切つて少し涼しくしたりけり
屋上やなみだのやうに咲いてゐた

東京

田中 藤穂

橋の上

百合の木の実の落ちてゐる橋の上
秋の蚊がうしろに回り唸りけり
縫ひぐるみとお話してる秋夜長
樹々しづか大台風が海上に
秋夕焼むかしは富士の見えし坂



三重

長崎 桂子

秋の声

まどろむや懐かしい顔秋の声
往来は盛んになりし秋の声
日暮よりか細く鳴くや秋の声
八千草の空地の斜面いと元氣
野にありてひととき飾る草の花

東京

森 なほ子

葡萄かな

食べ了へて思ひ出となる葡萄かな
秋灯や電気飴の次電気椅子
芒の根南 蛭煙管にて点火
剪り取りし葡萄子の手を溢れけり
秋風の短冊散らす句会かな

東京

赤座 典子

望の月

ニューヨークランド一日遅き望の月
良夜かな遊び尽して孫帰る
野分とて物買ひ込みて籠城す
同型の風台風と予報かな
建売りに未だ万国旗九月尽

埼玉

秋川 泉

栗御飯

夜の雨呼吸深くしてヨガの秋
稲妻の先導するかロードバイク
秋の夕ドクターヘリの飛来せり
日の射して炎となりし彼岸花
栗御飯のほのかな甘味病む人へ

東京 石森 理和

入院

秋雨や我が家の居間に淀泊中
柿実る糖質制限食つづく
病院の医師はN極道標
ごしき鶉好きな絵ハガキ机辺に
虫の声や我が家を後に病床へ

埼玉 大日向幸江

昭和

風澄むや朝の目覚の心地良き
煮豆買ふ昭和の暮らし残る秋
あけび籠下げて分け入る茸山
晩秋の芋茎干すも昭和かな
通人の手にしたらせる芋焼酎

東京 七郎衛門吉保

秋の晴

秋天と地の黄葉色二色刷
温泉に逼る越後三山秋の晴
林檎より幟が先のリンゴ園
椿の実ゴムパチンコの鉄砲玉
栗を剥くアーミーナイフと萩の皿
新涼^{前号正誤}や掘り起こしたる農校生

東京 篠田 純子

昼の虫

軟膏のふた見失ふ昼の虫
幾たびも霧立ちのぼる谷のあり
赤き実の名は何やらん霧晴れて
電^{いなづま}やビルのはざまに突きささる
グーグルでぐるぐる迷ふ秋の風



石川

定梶じょう

落穂拾ひ

国境ひ河が朗々良夜にて
ながれ星その時猫の耳うごく
秋めくや授業中かも廃校舎
ポケットに秋思しまうて雑踏へ
遠を行くサイレン落穂拾ふかな

東京

須賀 敏子

秋の空

秋澄めり天変地異の国なれど
曼珠沙華雨を留めて傾きぬ
妹の農業日誌大根蒔く
九月来る早三回忌トモ子さん
西武ライオンズ優勝
空高し優勝セール始まりぬ

九月号作品より

秋川泉・森なほ子

夜になり赤くなりたる夏の月

佐藤 喜孝

詐欺らしきハガキ届けり冷やし酒 須賀 敏子

赤い月を見ることが出来るのは、早朝や夕方、月が低く地平線近くにある時。そして大気の状態次第で赤く見える場合があるとのこと。本当に月を見る時、月は人の心、魂に語りかける不思議な力を持っていると感じます。(秋川泉)

千一夜物語蚊遣豚炆ぎ

定梶じょう

『千一夜物語』(アラビアンナイト)は、「アラジンと魔法のランプ」など有名な御伽噺で知られていますが、しかし本当は官能的で暴力的な物語が多く、大人になった今だからこそ夏の夜に眠気を忘れて読む物語。ササン朝ペルシャの王に妻が毎夜物語を語る形式を採る。さて作者は、どのお話にわくわくドキドキなさったのでしょうか。(秋川泉)

詐欺は電話とばかり思っていたら、ハガキで届く詐欺もあるのですね。ハガキとは、ちよつと効率悪そうな、アシがつきやすそうな気がします。犯人は単独犯で、五、六十歳くらいとか、文章にちよつと間違いがあつたりとか、文面を練る様子まで……。ハガキを肴に冷やし酒も進んだことでしょうか。(森なほ子)

油照り出雲風土記を卓上に

田中 藤穂

さすがですね。今年のあの暑さに、卓上の本が「出雲風土記」……誰かさんとは大違い。私なら、数行でお昼寝に移行しそうです。尊敬の念に駆られ、この句を取り上げさせていただきました。

(森なほ子)

雨上り電動三輪車半ズボン

長崎 桂子

この作品に出合つて目から鱗の思いが致しました。三輪車と半ズボン。これはまさしく「幼い男の子」。そう思ったのです。ところが「電動三輪車」は全く位置がいました。現代では高価であります。車椅子ごと乗れる電動三輪車まであります。半ズボンの男性でしょうか。颯爽と電動三輪車でお買物という光景が浮かびました。年を重ねても澆刺と日々を過ごす。その応援歌のように思われました。

(秋川泉)

干し草の匂の茅の輪くぐりけり

森 なほ子

毎月六月に行われる神事。夏越の祓の時、神社の参道に設けるチガヤで作った大きな輪。これをくぐり無病息災を願う。作者は、この輪をくぐられた時、干し草の匂が……と。私も、その干し草の匂と共に

にご利益を頂きたいと思いました。(秋川泉)

ただいまと七夕竹をひきずりて

赤座 典子

ただいまと帰って来たのはだれでしょう。父？母？子？この句からは何とも言えないのですが、七夕の笹を手に入れて帰って来たのか、学校や園で用済みになった竹をもらって引きずりながら子が帰って来たのか。私は前者と思って句会でこの句をいただいたのですが、作者の説明はたしか後者だったと思います。いずれにしても引きずって帰るという一点が長い竹の感触をリアルに伝えています。

(森なほ子)

陸奥湾に二重にかかる朝の虹

秋川 泉

「虹」の席題で作られた句。作者の実体験とのでした。雄大な景を見られて一生の思い出になりましたね。しかも二重の虹！羨ましい経験をそのま

ま句に。(森なほ子)

summer・sale・帽子店から案内状

石森 理和

英語をそのまま使ったのがお洒落。帽子店がいまでもあるのですねえ。それとも記憶の中の帽子店？若き日のお洒落な作者の夏帽子姿を思い浮かべました。(森なほ子)

夏風邪や猫を抱へて臥せてをり

大日向幸江

この夏の暑さは、ひとしお厳しかった。夏と云えども風邪の最中はゾクゾクと寒かったり……。それで猫を抱えてお休みになった。こんな時は本当に猫に癒されますね。さぞお辛かった事とお察し致します。(秋川泉)

打ちまける茶色絵具や夏出水

七郎衛門吉保

この夏、何度も放映された、各地を襲ったあの濁

流。まるで茶色の絵具をぶちまけたような。リアルにあの映像が浮かんできます。わが身に起きたことではなくても、この句を読むと洪水の恐ろしさをまざまざと思い出しました。(森なほ子)

メイドカフェ暑しをどこが猫の耳つけて

篠田 純子

何と好奇心をそられる句でしょう。そこは夢の御伽の国なのでしょう。かわいらしいメイドに猫耳をつくえてもらつてのサービスを受ける男子。しかもそれを作者は暑苦しく感じられたのでしょうか。とても「今」を感じます。作者は、一途いらしたのでしょうか。私も行ってみたいくなりました。(秋川泉)

新涼や烏が烏のそばにゆき 佐藤喜孝

離れ住む妹ひとり夏畑 須賀敏子

鴉二羽屋根にて喘ぐ暑さかな 田中藤穂

登り来て噎せる香に満つ花茨 長崎桂子

風に雨気七夕飾りさざめける 森なほ子

薄紅の芋茎をまづは小鉢にて 赤座典子

送り火や燃えて暫しの黙のあり 秋川 泉

朝まだき紋白蝶のふはふはと 石森理和

澆刺と百才の日々雲の峰 大日向幸江

灼熱に蟻も速歩のアスファルト 七郎衛門吉保

日焼けして帰りのバスの砂ざらざら 篠田純子

啞蝉も少し声出す蝉しぐれ 定梶じょう

喜孝抄





佐藤 喜孝

長崎 桂子

上下左右樹を虐げる台風裡
氣象急変くつきり二重虹癒す
白秋の印象派展親し一日

一句目。颱風が樹木を揉みしだいてゐる。あの泰然とした大木でもひとたび台風に出遇ふと、上下左右に揺さぶられる。それでも足りぬと大地から引っこ抜かれる。そんな樹木を虐げる台風の威力を詠まれた。

二句目。『急変』は、大方、良い方から悪い方へ一変すること。辞書にも使用例として「病状が急変する」とある。これだけでは病気が良くなったのか悪くなったのか判然としないが、大方悪くなったときに使ふとおもふ。

掲句は逆の意味で使はれてをられる。

雨や風が急に止み、振り仰ぐと空には虹が出てゐるではないか。それも珍しい二重虹。この句の場合『癒す』ではなく『癒される』。「台風急変二重の虹に癒される」。三句目。この句の『白秋』は人名ではなく『秋』の異称。一寸言葉を詰め込みすぎたか。「一日を印象派展〇〇〇」では。

篠田 純子

万世橋より電車あれこれ天高し
山肌に添ふも背くも霧立ちぬ
ふたつみつ山重ねたり霧晴るる

一句目。むかし交通博物館が万世橋の傍にあつたかと。だが『より』とあるのでこのこととは違ふ。万世橋の下を神田川と総武線が通つてゐる。『総武線』にはあれこれ電車は走らないので万世橋より眺めてのことではない。評者どこかで見落としがあるやうだ。残念。

二句目。山肌を霧が立ちのぼる。山肌に添ふ霧もあり、背く霧もある。『背くも』がただの風景句に倦きたらぬ作者の表現。だがこの語はこの句では浮いてゐる。

三句目。前句と違ひ作品に安心して浸ることが出来る。霧が薄らいできた。今まで何もないと思つたところにふたつみつ重なつた山が浮んで来た。薄墨色の水墨画の世界。私もどこかで見たやうな心持ちになつた。『ふたつみつ』が活きてゐる。

定梶 じょう

稲架下りて見惚るる稲架の高きこと
梵鐘や野分一過を愉快がり
使はねど土瓶大切獺祭忌

一句目。『稲架下りて』は旅行者には出来ない。羨ましい句。自らが組んだ稲架の高さに見惚れる。働く人の充実感が伺へる一句。

二句目。何ごともなく過ぎた野分の後は大気も空とと

もに洗はれ深呼吸したくなる。朗らに打ち出される梵鐘の音、山村の景が浮んで来る。

上五に『や』の切れ字を使ふことほど気持ちの良いものはない。堀内一郎さんの句に「やかなけり使はぬと決めつづれさせ」がある。意図は聞きそびれたが訊ねても云はなかつたらう。この句の四年前に「やかなけり我が春愁の袖たもと 一郎」がある。因みに一郎さんの『かな止めの句は1195句中39句。『けり』止めは33句あつた。じょうさんは1453句中『かな』が89句。『けり』が73句。それがどうしたと云はないで下さい。

三句目。わたしの好きなじょうさんの句に「土瓶などさびしい時のために買ふ」がある。じょうさんには『土瓶』は季語ほどの重さがある。使はなくなつた土瓶、大切だから使はぬといふ事もある。

芥川龍之介の『一つの作が出来上がるまで』の冒頭に

「がある。例へば最初は土瓶を書かうと思つてゐて、それが何時いつの間まにか鉄瓶に出来上がることもあり、又初めから土瓶を書かうと思ふと土瓶がそのまま出来上がることもある。その土瓶にして

も蔓を藤にしようと思つてゐたのが竹になつたりすることもある。私の作品の名を上げて言へば「羅生門」などはその前者であり、今ここに話さうと思ふ「枯野抄」「奉教人の死」などはその後者である。」

また、『貝殻』のなかの「河鹿」に

或温泉にある母から息子へ人伝に届けたもの、
——桜の実、笹餅、土瓶へ入れた河鹿が十六匹、
それから土瓶の蔓に結むすびつけた走り書きの手紙が一本。

その手紙の一節はかうである。——「この河鹿は皆雄に候。雌はあとより届け候。尤も雌雄とも一つ籠に入れぬやうに。雌は皆雄を食ひ殺し候。」

NETから引用してなんだが、無理に癪祭忌と土瓶を関連づけることはない。が龍之介と使ひ古された土瓶を並べておもふと言葉に出来ない空気が生まれる。一寸した例へ話に土瓶が登場するのは、龍之介の日常に馴染んだものであつたのだらう。

須賀 敏子

台風と地震の国に生まれけり
金木犀オレンジ色の輪を作り

一句目。自然の威力に対する悟りか諦めか。台風の進路を見てみると、よくも沖繩あたりから右カーブして日本列島を上手に伝つてゆくものだと思れる。幾つものプレートがぶつかり海の底だったものが盛り上がった日本列島。プレートの活動は止まず正に地震の巢の上に日本はある。掲句のやうに開き直るしかないか。

二句目。古の人が「金」と美称を持つて金木犀をたれたものを、作者はオレンジ色と言ひ直すリアリストである。「輪」は散り敷いた金木犀の花の様であらうか。わたしはやはり「金」と欺されてゐたい。

森 なほ子

仙人草人の計を聞く木のベンチ
海水は羊水台風またも産み
いかがですセシウム入りの茸汁

田中 藤穂

芋の葉に露光りつつ夕暮るる
廃れゆく行事月見のお団子も
パソコンを持たぬ生活小鳥来る

一句目。閑かな句境。「光りつつ」と今其処にゐる感のしてよい。そしてその光も失せてゆくであらうと思ひつつひとときの夕景に染まる作者と読者。この句の「芋」は里芋である。このごろ「焼き芋」といふ表記を目にする。わたしがくだくだ書くより歳時記を抜き書きす。

馬鈴薯。地下茎が馬の鈴のように連なっているのがこの名がある。「じゃがたらいも」が転化して「じゃがいも」となった。

薩摩芋。江戸初期、南九州に渡来した。

芋。俳句で単に芋という場合は「里芋」のこと。

二句目。俳句がわたしに月の美しさを教へてくれた。月見の宴は廃れる前にはじめから我が家にはない行事

一句目。「仙人草」は佳き名。であるが全く知らぬ花。

調べると十文字の形をした白い花であつた。ベンチの傍らで聞く人の計。聞きながら仙人草の花をふと思つた。傍らに咲いてゐてもゐなくともよいが、なぜかこの花と人の計を重ねてゐた。さういはれて仙人草の写真を見ると寂しげな花だ。この花は全草有毒ださうだ。

二句目。羊水は八百グラムほどとある。意外に少ない。海水と同じやうな成分とか、生命の不思議さを思ふ。この生命誕生の海を羊水として台風は次から次と誕生する。想像力と機知を働かせた作品。

三句目。誰に向かつて「いかがですか」と云つてゐるのか考へた。原発を推進してゐる人へだらうか。それとも……どちらにしても、このやうにメッセーじ色の濃い句は、風評被害に荷担せぬやう誰が誰に言つてゐるのか確り書かぬと難しい。

だった。月を祀るとなれば坐して月を待ちたい。現今の住居は昔と違ひ開放的に出来てゐない。「外にも出よ触るるばかりに春の月 中村汀女」である。こんな住居環境ではお月見の風習も廃れてゆくのも仕方がないか。藤穂さんの縁側ではお月見が出来るのだらうか。出来たら一度お月見をしてみたい。

三句目。一般家庭でのパソコンを使ふ目的は時と共に変はつてきた。はじめのころはBASICといふプログラム言語を学ばなければならなかった。つぎにMS-DOSの時代になり個人でもワープロ表計算などに使はれた。今はインターネットといふ化け物に使はれてゐる。時代は進み電話線で繋がつてゐたネットも今は無線で繋がつてゐる。そんな時代の掲句である。旅鳥は地図を持たず旅をする。「小鳥来る」はわずらわしい今の生活に一矢報ひる作者の選んだ季語である。

台風裡「辺野古ノー」の勝名乗
しまんちゅの勁さ優しさ秋の草
穏やかな日々来たれかし鰯雲

一句目。先般の沖縄知事選の際の一句か。軍事のことは相手国のあること、全て国民に知らせることは不可能なことは分かるが、それをよいことに知らせなければならぬことも知らせてゐないのでと猜疑心が起る昨今。あの日米安保がノーであつたら今日本はどんな社会になつてゐるのかと夢見ることがある。掲句、*“勝名乗”*と少し碎けた物言ひでアジビラのやうな句にせぬところが好ましい。ただ一音足りぬので落ち着かぬ。「台風裡「辺野古はノー」に勝名乗」。

二句目。沖縄の人の「勁さ優しさ」はお上から虐げられたことも一因か。沖縄の四季の変化は分からないが「秋の草」は一考あるか。

三句目。典子さんの「はしたて集」は三句の連作になつてゐる。一句一句が隣の句と助け合ひながら展開する。

で、この句は前の二句に続けて読むのでは印象が十分異なる。これはこれでおもしろい試み。次回は一句一句が独立しても確り意志が伝へつつ、その上連作の佳さが發揮できる作品を期待する。

大日向幸江

幸せを運ぶ燕の旅立ちぬ
茸取り人招きよす毒キノコ
茸取り獣道ある事を知る

一句目。燕が巣を作るとその家は繁栄するといふ。わたしも作つて欲しいと望んだが、燕の好む方角があるらしくつひに来てくれなかった。よつて繁栄には見放されてしまった。秋には南方へ旅立つと聞く。十一月にバンコクで舟遊びをした時、川面を無数の燕が飛び交つてゐた。どれかは日本から帰つてきた燕かと親しく眺めてゐた。掲句一工夫して「幸せを運びし燕旅立ちぬ」。

二句目。たしかに毒茸は派手な姿をしてゐるものがある

る。人を呼ぶためにさうした姿をしてゐるとは恐ろしい。おもしろい発想。上五は茸が二回出る必要を感じないので一考を。

三句目。山深くに茸取りに行かれたのであらう。これは獣道よと教へられたのかも知れない。山菜採りて熊に襲はれたといふニュースを聞いた。茸にばかり気を取られては大変なことになる。

間違ひといふことではないが、茸取りの「取り」は一般には「茸採」と採を使ひ名詞の時は「り」を送らない方がすつきりする。

七郎衛門吉保

役終てアトに轉身する案山子
木・竹・陶・金・漆の秋工芸展
秋麗今朝のコーヒーケニア産

一句目。昔なら役を終へると「捨て案山子」になるのだが、この句ではアトになると教へてくれる。如何様になるか知らぬが作者のアンテナは「今」を敏感に捉え

てゐる。

石森 理和

二句目。わたしの蔵書の中に『日本の工芸』（淡交新社）がある。「染」・「漆」・「金工」・「紙」・「人形」・「ガラス」・「織」・「木・竹」・「陶磁」・「石・玉」別巻「琉球」。昭和41年発行。若い頃仕事の参考にと求めたもの。掲句はこれらの名工の技を見に行かれた折の作品。感銘を受けての作品とおもふが「秋工芸展」は苦しい。そこで「木・竹・陶・金・漆秋の工芸展」との“の”の位置を移してみた。

三句目。秋の気持ちのよい朝。ケニア産と聞けばやはりケニアの風光を偲ぶもの。モーニングコーヒーを入れゆったりと過ごす朝のひとつとき。「よく私へのご褒美」といって指輪や高級レストランへ行くドラマの一シーンがあるが、この句は人生のご褒美のひとつときかも知れない。

鰯雲 眼下の校庭 昼休み
秋晴れやウオーリ捜し 人人人
敬老の祝膳 なりし 栗ご飯

一句目。「眼下」とは、鰯雲か鰯雲に乗って見下ろしてゐるやうだ。現実味がないので実際は高階から見ているのかも知れぬ。昼休みの校庭には、生徒が出てゐるのか昼食を取ってゐて誰もゐないのか分からない。大きな景で気持ちも良いが、述べたやうに今ひとつ判然としないうところがあるのが残念。

二句目。「ウオーリ」は Walk なので「ウオーリー」のやうだ。「秋晴れ」とあるから絵本を読んでの句ではなさう。掲句のやうな催事があつたのかも知れぬ。お出かけになられての句であらう。

三句目。この句の作者は老人を敬する人なのか、敬される人なのか。傍観者のやうな句で栗ご飯が淋しさう。どちらかに白黒を付けられたらよい。これは、実年齢をいつてゐるのではなく、心構へのこと。祝はれるより祝

ふ心持ちでゐたいものだ。中七は省略。

秋川 泉

句をおもふ肩秋茜止まりけり
群とんぼ広野の子らにまとはりて
昇りきし十五夜赤し手を広ぐ

一句目。「句をおもふ」は俳句一般のことをおもつてゐるのではなく、句作をしてゐるのであらう。そんなをり肩に秋茜が止まった。その時のそのことを素直に書き留めた。泉さんのことから秋茜に言葉にならぬ言葉で話しかけたかも知れぬ。自然の中で得た至福のひとつとき。
二句目。こどもと蜻蛉の群がたはむれてゐる。赤トンボはなぜか人に寄ってくる。うれしさうにその光景を眺めてゐる作者。

三句目。山並みや町並みからぬつと昇ってきた十五夜月。天頂にあるときの月と違ひ生まれたての月は大きく

独特な色をしてゐる。なぜか両手を広げた作者。やっと三句目で作者の声がはっきり聞こえた。月への無言のごあいさつ。

少し残念なのは「十五夜」である。十五夜は満月の夜の謂で月そのものを指す言葉ではない。一考あれかし。

前月号より掲載順を俳号を五十音で並べました。以後一人つつ順送りに後ろに回ることになりました。よろしく。



出水禍の沖の夕焼けなつかしむ

じょう

万葉集、大伴家持に次の歌があります。

鳳至ふげしの郡にして饒岸川にぎしがわを渡る時に作る歌一首

妹に逢はず 久しくなりぬ 饒岸川

清き瀬みづうらごとに 水占みなうら はへてな

「水占」は流れて吉凶を占うことのように、実態は不明ですが、「はへてな」の「はへ」を「延はええ」（延縄漁の「延はえ」）と解して縄を使った占い、とみるのが一般的です。で、「水占延へてな」は「水占の縄を清らかな瀬々にながしてみたい」あるいは「水占をしてみよう」などと解釈されています。

家持が越中守として富山に赴任し、当時越中に合

わされていた能登国に巡察巡検したのは、奈良時代、八世紀のむかしですが、その饒石川にぎしかわは表記を仁岸川と変えて今も私の住まう村なかを流れていますし、先頃までこの地は鳳至郡ふげし 劔地村つるぎむらといいました。

そんな歴史を負った仁岸川の、日本海へ注ぐ河口すぐかたわらに右記の歌碑が立っているのですが、この歌碑、場所を変えること三たびのうち二回は洪水のため。他地の例にもれずこの川も出水が多かったのです。集中豪雨もありましたし、しとしとと三日三晩降って、なんてこともありましたが、豪雨、長雨のあとはふつう現れない夕焼を見ることがある。

懐旧、懐郷、懐古、ふしぎに懐かしさを感じるのですが、そんな時の夕焼は安堵の赤なのかもしれません。

水底の水きらきらとわらはやみ

喜孝

『最初の記憶』に三才と思へる時、麻疹にかかった記憶を書いた。書いたと思ったら、安心したのだらうか、ふつと消えてしまった。どっちみち淡くあやふやなもので、記憶とも云へぬものであったが。今夏、ふつとこんな句が出来た。出来た後眺めてゐたらふと、わたしの最初の記憶を句にしたやうだなとおもった。意図したことではないので、ひとりおもしろがってゐる。

嫌ひなものがこの年になっても色々ある。いや、増えてきたかも知れない。特に水が嫌い。幼児の時銭湯で母親に仰向けにされ、頭を洗われるのを嫌がったさうだ。学校のプールにはなんだかんだと無い頭能を使つて一度も入った事がない。子供が出来、水遊びに仕方なくプールに入ったらいつ一瞬頭が

水中に入り溺れるかと思った。家族に笑はれたものだ。そんな親でも子供たちは水泳が好きだ。金槌の子が金槌にならずに済んだ。溺れさうもない浅い水で溺れた話を聞くが、然もありません。

しかし映像や水の外から見る水の中は興味がある。食用の泥鰌を料ることができず飼ってしまった。七、八年小さな水槽でこの泥鰌は過ごした。旅先の田んぼから田螺を連れてきた。子供が生まれたり俳句の素材になったのしませてくれた。

今はひとり暮らしたので、よんどころがないかぎり安全を期し浴槽に入らず、シャワーで済ませてゐる。勿論、酒も嘗めるだけにしてゐる。

葉音

羽織

汗の背へ梢の秋の葉音かな
はじめての寄席めまぐるし夏羽織
裁初や母の羽織をブラウスに
初燕二人羽織の一休み
茶羽織を先づ脱ぎてをり猫柳
一呼吸するりと落す夏羽織
秋霖や祖母の羽織をお手玉に
咄家の話半ばに羽織ぬぐ
いでかけて一枚羽織る秋の雨
極暑の日また羽織る脱ぐくりかへす
厳めしく外郎売りの冬羽織

墓

寒椿高き囲ひの父母の墓
青蜥蜴灼けたる墓を鎮めけり
空蟬の目に驚きぬ捨て寝墓
赤のまま上等兵の墓のそば
春爛漫頑固親父は墓の中
春の雨母校見下ろす夫の墓
山茱萸が目印なれや父祖の墓
白梅や芙美子の墓を探しをり
墓守の腰の手袋涅槃西風

井上 石動

赤座 典子

須賀 敏子

赤座 典子

篠田 純子

赤座 典子

石森 理和

藤野 寿子

芝宮 須磨子

長崎 桂子

秋川 泉

鈴木 多枝子

後藤 志づ

渡邊 友七

栢森 定男

松村 美智子

芝宮 須磨子

関口 ゆき

須賀 敏子

芝宮 須磨子

春の夢利き足で出る墓の穴
鯉のぼり草があるから墓があり
遠くない話で墓を洗ひをり
虫しぐれにはかに墓の闇深む

俳優の墓に花あり日脚伸ぶ

山昏れて梅の香まといふ墓三基

梅一輪ほころびかけし亞浪の墓

彼岸入墓前の息子ぎこちなく

鐘霞むお伝の墓に辞世の句

南無八百屋お七の墓の白あぢさゐ

道ばたに合歡の花咲き夫婦墓

墓守もわれも老いけり曼珠沙華

茶髪の人杖を持つ人墓まゐり

集落のあれば墓あり石路の花

歌麿の墓の華やぎ石路明り

冨のこの墓上等兵で死にき

墓の横にコンテナ積む駅雪柳

白虎隊の墓手をかざし手をかざし

雪の道一つの墓に続きをり

冷えまといふ影を去来の墓に置く

雪割れて隠し田の隅墓現るる

無縁墓寄せ集められ花祭

どこまでも続く花蔭父母の墓

佐藤 喜孝

堀内 一郎

堀内 一郎

渡邊 友七

田中 藤穂

田中 藤穂

芝宮 須磨子

石森 理和

森山のりこ

芝 尚子

渡邊 友七

鈴木 多枝子

田中 藤穂

芝 尚子

定梶 じょう

篠田 純子

堀内 一郎

渡邊 友七

渡邊 友七

渡邊 友七

齊藤 裕子

芝 尚子

思ひ出と鬼灯を提げ墓の道
秋薔薇白をたつぷり父の墓
落椿捧ぐ波郷の黒い墓
新墓へ花抱いてゆく霜柱
料峭や墓憲兵と彫られあり
墓幾つ岩に還れり地虫鳴く
立冬や一年を経し犬の墓
一つとや句碑はわが墓つつじ燃ゆ
墓を出て紋白蝶になつてゐる
おふくろの名の墓小さし萩の花
四五本はどここの墓にも彼岸花
兄妹墓は別々寒椿
従三位の墓を仰げば冴返る
山法師花の白さや父母の墓
葉桜や舟形の墓回向院
炎天や墓も大きく紀伊国屋
一族の墓を被へり糸桜
白梅や力道山に墓ありぬ
うぐひすに上手下手あり虚子の墓
襟足に滴りの叱咤虚子の墓
赤き薔薇北条政子の墓強し
花のなき墓一つあり盂蘭盆会
墓洗ふ姉も無口になりにけり

長崎 桂子

鎌倉 喜久恵

田中 藤穂

田中 藤穂

田中 藤穂

渡邊 友七

堀内 一郎

堀内 一郎

東 亜未

鈴木 多枝子

田中 藤穂

須賀 敏子

須賀 敏子

緑濃し古今の墓を抱く寺
秋彼岸荒れ放題の墓に水
時ここに白雲に化し墓の梅
しだれ桜古き墓の背撫つるなり

墓守のごとき桜の大き洞

葉桜やさらでも青き墓の径

コスモスの二本を剪つて親の墓

団栗を山盛にして栗鼠の墓

水かけて墓あたらしき青木の実

柳沢の墓に傾ぎし春の杉

墓の数屯するかにうらけし

夏燕友の墓ある海の街

新しき友の墓訪ふ夏立つ日

石の辺に墓の屍秋の雨

信玄の女の墓に草青む

満天星の花が目じるし母の墓

菜の花やこんなどころに皇子の墓

箔

素行の墓に乃木大将の梅もみぢ

日ざらしの金箔の門鳥総松

春の海金箔をのべ日輪落つ

金箔をすりへらしゆく四月かな

鎌倉 喜久恵

堀内 一郎

石森 理和

篠田 純子

早崎 泰江

竹内 弘子

長崎 桂子

井上 石動

須賀 敏子

竹内 弘子

佐藤 恭子

定梶 じょう

田中 藤穂

須賀 敏子

田中 藤穂

赤座 典子

竹内 弘子

田中 藤穂

篠田 純子

佐藤 喜孝

鎌倉 喜久恵

佐藤 喜孝

あとがき

料る

句会で「料る」なる語彙が披講の時「りようる」と読まれた。違った読みがあった気がしたのでスマホで調べたら「はかる」と読み「りようる」は誤用とあった。家に帰りいくつかの辞書にあたったが「はかる」は影も形も出て来ない。あれはなんだったのだらう。因みに『日本国語大辞典』の例文を、

○ 残暑しばし手毎にれつれ瓜茄子 芭蕉

○ 手荒く料理^{レリツ}つて、腥い骨だらけの鯛飯を焚き

徳富蘆花「思出の記」

○ れふつてくだんせ 黒本・化物蘇我

わたしのなかでは問題解決。

原稿募集

いままで「俳境流連」として、自句を枕にした随筆をお願いしてゐた。少し硬いのでこれからは「俳句の

尾緒」としてお願い致します。枕にする句が自句他句問ひません。字数も短くとも、長くともご自由にお書き下さい。お待ちしております。

(喜孝)

二〇一八年十一月号

発行日 十一月十一日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリエイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)